

ICAANE から見た近年の西アジア考古学

—第10回及び第11回国際古代西アジア考古学会議参加記—

三木 健裕

Current West Asian Archaeology and ICAANE: An Essay on the 10th and 11th International Congresses on the Archaeology of the Ancient Near East

Takehiro MIKI

キーワード：西アジア考古学、国際会議、ワークショップ、現地調査報告、比較分析

Key-words: Near Eastern Archaeology, international congress, workshop, field report, comparative research

はじめに

国際古代西アジア考古学会議 (International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East) は、欧州の大都市で2年に1回開催される、西アジア考古学を専門とする研究者で構成される最大規模の国際会議である。1998年ローマでの第1回大会以来、本学会からの参加者も継続的にみられる (紺谷 2001; 門脇 2009; 宮内 2015)。この国際会議は1. 一般発表、2. ワークショップ、3. ポスター発表の3種類の発表形式からなる。一般発表では指定された研究テーマに沿った発表を行う。ワークショップでは特定の地域・時代・研究トピックに関心のあるオーガナイザーを募り、オーガナイザーが打診した研究者が発表を行う。本稿は2016年第10回大会於ウィーンと2018年第11回大会於ミュンヘンの参加記のかたちを取りつつ、両大会の比較を行うことでこの2年間の「西アジア考古学」の変化を探る。第10回大会に関しては2巻からなる論文集 (Horejs et al. eds. 2018) が既に刊行されている。

この期間はちょうど筆者がドイツ留学を開始した2015年から現在までの期間に該当する。この期間には欧州難民危機 (2015年)、パリ同時多発テロ事件 (2015年) を端緒とする欧州各国での無差別テロ事件、欧州連合からのイギリス離脱決定 (2016年)、そしてドナルド・トランプ氏の第45代アメリカ合衆国大統領就任 (2017年) 及び欧州各国でのポピュリズムの台頭があった。欧米諸国、すなわちICAANEの大部分の参加者の所属する研究機関が所在する国々に動揺と変化があった時期であったといえる。そしてその変化には西アジア地域の政治情勢が大きく関わっていたことは疑いない。このような変化の中でICAANEに変化はあったのだろうか。

また筆者がドイツに留学して改めて実感したことがあ

る。筆者が現在所属する大学は世界各国から留学生が来ており、外国人向けのドイツ語のクラスでは、他の欧州諸国、西アジア諸国のほか、中国、韓国、中南米諸国、東南アジア、アフリカからの留学生と知り合うことが多い。にも関わらず、自身の所属する西アジア考古学専攻では、欧州、西アジアからの学生以外とはほとんど出会わない。欧州、西アジア諸国出身の研究者の多さは西アジア考古学がたどった歴史的経緯と古代西アジアが西欧文明の礎であるという事実がその大きな原因であるとはいえ (Pollock and Bernbeck 2005: 6-7; 藤井 2013)、理工学系の学問分野と比較して、欧米諸国にバックグラウンドを持った研究者が多数を占め、先史・古代の西アジアに学術的な関心を向ける西アジア考古学は特異な学問であると感じる。筆者はこの独特な学問分野である「西アジア考古学」の現状を探る手段としてICAANEを提案したい。

世界各国の研究機関で研究・教育に携わる西アジア考古学者たちは、西アジアの様々な地域で現地調査を行う。彼らはその成果を公表するため、ICAANE開催都市で一堂に会し、英語で (稀にフランス語、ドイツ語で) 口頭発表し、情報交換と相互批判を行う。参加者は学部生から、退官した名誉教授まで、幅広い年齢層にわたり、女性、男性の研究者が入り混じる。初めての発表で緊張し早口になる大学院生もいれば、数十年來の付き合いである研究者との再会を楽しむ大御所教授もいるだろう。発表を通して世代を超えた新たな交流が生まれ、論争が巻き起こったりグループダイナミクスの中にもある。そのようなICAANEの中で確かに「西アジア考古学」及び西アジア考古学者は育まれ、学問が次世代に継承されている。このような研究者の集合体として捉えれば、ICAANEは「西アジア考古学」の現状を探るうえで豊かな情報を持った研

究対象と考えることができる。

ICAANEでは口頭発表を含む多くの出来事が生じている。だが小規模の国際ワークショップとは異なり、700人を超える参加者が集まる場所、同時に10近くの分科会が数日間にわたって行われる場所では、そのような出来事すべてを一参加者が実際に観察して把握するのは不可能である。そこで以下本稿ではICAANE第10、11回大会の概要、発表者の所属する研究機関の所在国、一般発表のテーマ、発掘・現地調査部門における現地調査が行われた国、ワークショップのテーマ別に第10回、第11回交互に記述し、第10回大会と第11回大会の違いについて考察し、「西アジア考古学」の変化と現代社会の関わりを考える。

第10回ウィーン大会、第11回ミュンヘン大会の概要

第10回ウィーン大会は2016年4月25日(月)から4月29日(金)まで5日間開催された。ちょうどこの前日の4月24日、オーストリアの連邦大統領選挙の第1回投票が行われ、極右政党オーストリア自由党の党首ノルベルト・ホーファー(Norbert Hofer)が得票率で首位に立ったばかりで、街中に選挙ポスターが多く貼られていた。会場となったのはオーストリア科学アカデミーのメインビルおよびその周辺の建物である。会場となった古い建物の一部には壮麗な壁画が施されており、発表者と聴衆を圧倒した(図1)。初日にメフメト・オズドアン(Mehmet Özdoğan)氏が、4日目にティモシー・ハリソン(Timothy Harrison)氏が、それぞれ西アジア考古学の現状、危機に瀕する文化遺産への取り組みに関する基調講演を行った。2日目の晩に催されたレセプションは豪華なことにウィーン市庁舎のボールルームを貸し切って行われた。閉会式では11条からなる、西アジアと北アフリカにおける危機に瀕する文化遺産への提言、ウィーン声明(Horejs et al. eds. 2018: 15-16)が宣言された。そのままメインビ

ルで懇親会となった。本学会からの参加者は以下の通りである(敬称略):赤司千恵、足立拓朗、小高敬寛、小泉龍人、下釜和也、長屋憲慶、西山伸一、藤井純夫、長谷川修一、前田修、山藤正敏、渡辺千香子。なお期間中参加者はウィーン市内の一部の博物館に無料で入場することができた。

次に第11回ミュンヘン大会の概要を説明する。今回でICAANEはローマでの第一回開催(1998年)から20年目の節目を迎えた。ミュンヘン大学構内を会場とし、前回より3週間早く、2018年4月3日(火)から4月7日(土)まで5日間開催された。今回から学生が一般発表を希望する場合は、指導教授からの推薦状が必要となった。開会式では組織委員会委員長であるアーデルハイト・オットー(Adelheid Otto)氏の挨拶ののち、プロの演奏家によりショパンのワルツ第7番嬰ハ短調 作品64-2が演奏され、紛争の終わらないシリアに捧げられた。その後基調講演が行われた。一般発表のテーマのうち、「生活空間を形作る」、「古代西アジアにおける移動性」、「コンテクストに埋め込まれた図像」の3つを主題としてそれぞれ、イアン・ホダー(Ian Hodder)氏、ロジャー・マシューズ(Roger Matthews)氏、そしてウルスラ・ザイデル(Ursula Seidl)氏が講演した。ホダー氏は自身の発掘するチャタルホユック(Çatalhöyük)遺跡での生活空間に関する近年の研究を紹介した。この講演の中では趣旨説明を兼ねた研究内容のみで、近年のホダー氏の著作『Entangled』(Hodder 2012)で述べられている理論に関する話はなかった。マシューズ氏は講演の冒頭で現代の難民・移民の移動性に触れつつ、過去の人々の移動性の研究手法とその方向性を紹介した。開催初日の晩、ギリシア・ローマ彫刻専門の美術館グリユプトテークにて最初のレセプションが行われた。美術館の内外で夜遅くまで参加者の歓談は続いた。最終日前日の晩にミュンヘン大学で第二のレセプ



図1 オーストリア科学アカデミーのメインビル天井に描かれた壁画(筆者撮影)



図2 ミュンヘン大学でのレセプションの様子(筆者撮影)

ションが行われた（図2）。ビールの本場ミュンヘンだけあって瓶ビールが参加者に振る舞われた。瓶に口をつけてそのまま飲むのがドイツ流である。本学会からの参加者は以下の通りである（敬称略）：足立拓朗、小高敬寛、小野塚拓造、小泉龍人、サーリ・ジャンモ、四角隆二、下釜和也、田代恵美、常木晃、津本英利、西秋良宏、橋本英将、長谷川修一、藤井純夫、増渕麻里耶、宮内優子。

発表者数、発表者の研究機関所在国、ジェンダーの比較

表1は2016年と2018年の発表者の所属する研究機関の所在国を総発表数、ジェンダー、一般発表、ワークショップ、ポスター毎に左から並べたものである。要旨集を一次資料として集計した。一発表者が複数回発表していた場合、一人にまとめず個別にカウントした。また本稿では要旨集に記載されているものの、実際にはキャンセルされた

表1 2016年、2018年ICAANEにおける発表者の所属する研究機関所在国ごとの総発表数、及びジェンダー、一般発表、ワークショップ、ポスター発表数の内訳

発表者の所属する研究機関の所在国	総発表数			ジェンダー (2016)			ジェンダー (2018)			一般発表		ワークショップ		ポスター	
	2016	2018	増減	女性	男性	不明	女性	男性	不明	2016	2018	2016	2018	2016	2018
Germany	110	116	6	50	60	0	57	59	0	51	71	46	39	13	6
Italy	83	97	14	49	34	0	59	38	0	34	41	34	27	15	29
USA	83	43	-40	45	38	0	25	18	0	32	23	51	17	0	3
UK	70	51	-19	35	35	0	29	22	0	31	37	33	12	6	2
France	69	50	-19	41	28	0	25	25	0	19	27	47	21	3	2
Israel	55	31	-24	18	37	0	13	18	0	21	18	33	13	1	0
Austria	42	20	-22	20	22	0	16	4	0	15	4	24	16	3	0
Iran	42	67	25	18	23	1	23	41	3	30	48	0	16	12	3
Australia	28	16	-12	21	7	0	8	8	0	15	12	13	4	0	0
Poland	21	14	-7	11	10	0	7	7	0	12	9	6	4	3	1
Canada	20	11	-9	5	15	0	5	6	0	5	9	15	0	0	2
Turkey	17	21	4	8	9	0	8	13	0	11	15	5	6	1	0
Japan	16	13	-3	4	12	0	1	12	0	13	12	2	1	1	0
The Netherlands	12	9	-3	3	9	0	3	6	0	7	5	2	4	3	0
Belgium	10	5	-5	6	4	0	3	2	0	7	5	2	0	1	0
Denmark	10	7	-3	7	3	0	1	6	0	4	3	5	2	1	2
Czech	8	3	-5	3	5	0	1	2	0	6	1	0	1	2	1
Greece	8	4	-4	2	6	0	2	2	0	2	4	6	0	0	0
Spain	8	9	1	2	6	0	2	7	0	6	3	2	3	0	3
Lebanon	7	2	-5	4	3	0	1	1	0	5	2	2	0	0	0
Switzerland	6	6	0	3	3	0	4	2	0	3	5	2	1	1	0
Finland	4	2	-2	2	2	0	0	2	0	2	0	2	2	0	0
Georgia	3	3	0	1	2	0	1	2	0	1	3	2	0	0	0
Russia	3	5	2	2	1	0	2	3	0	3	5	0	0	0	0
Sweden	3	2	-1	2	1	0	0	2	0	1	0	2	2	0	0
Iraq	2	3	1	0	2	0	0	3	0	2	3	0	0	0	0
India	2	0	-2	2	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0
Portugal	2	2	0	0	2	0	0	2	0	0	2	1	0	1	0
Saudi Arabia	2	0	-2	0	2	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0
Bulgaria	1	0	-1	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
Croatia	1	0	-1	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
Cyprus	1	1	0	1	0	0	1	0	0	0	0	1	1	0	0
Egypt	1	0	-1	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
Jordan	1	2	1	0	1	0	0	2	0	1	2	0	0	0	0
Kazakhstan	1	0	-1	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
Oman	1	1	0	0	1	0	0	1	0	1	0	0	1	0	0
Qatar	1	0	-1	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
Syria	1	0	-1	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
UAE	1	0	-1	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
South Africa	0	2	2	0	0	0	0	2	0	0	2	0	0	0	0
Argentina	0	1	1	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0
Armenia	0	1	1	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0
China	0	1	1	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0
Malaysia	0	1	1	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0
Slovakia	0	1	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0
Independent	0	1	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0
Unknown	4	0	-4	4	0	0	0	0	0	3	0	0	0	1	0
合計	760	624	-136	370	389	1	299	322	3	348	375	344	195	68	54

発表についてもカウントした。ジェンダーに関してはファーストネームから性別の判断を行った。2016年の総発表数は760本と、2008年の460本(門脇 2009)、2014年の580本(宮内 2015)を超えピークに達したと言える。公式では38以上の国から800名以上の研究者が参加したとある(Horejs et al. eds. 2018: 13)。2016年の発表数の多さは多数の参加者の存在を意味しているが、一人の発表者が複数回発表することに制限がなかったことも一因と考えられる。一転して2018年に至ると639本と120本以上の減少が見られた。両大会とも同時時間帯、一度に最大で13の発表会場で口頭発表が行われた。そのため興味のある発表が重複するということが少なからずあった。

発表者が所属する研究機関が所在する国に関しては、ドイツ、次いでイタリアが2016年、2018年とも首位であり、発表者の増加も見受けられた。一方2016年に83名を数えたアメリカは2018年にはそのおよそ半分にまで低下した。フランス、イスラエル、オーストリアの研究機関に所属する発表者もアメリカほどではないが減少が見られた。要旨集に記載されているイランの研究機関に所属する発表者の数は42名から68名と最大の増加を示したが、諸々の事情で参加できなかった発表者が多数存在するため、判断には注意を要する。2016、2018年ともに発表者の研究機関所在国上位10か国(ドイツ、イタリア、アメリカ合衆国、英国、フランス、イスラエル、オーストリア、イラン、オーストラリア)が全発表者の80%を占め、大きな偏りを見せる。その一方現地調査が行われる西アジア諸国からの参加者はおよそ20%を占めていたが、その70%近くはイスラエル或いはイランからの参加者であった。

ジェンダーに関しては会議全体を見た場合、2016年、2018年ともに男性研究者が若干多いものの、女性、男性研究者の割合はほぼ同じであった。参加者の少ない国は男女比の変化が顕著に現れる傾向があるが、発表者数の研究機関所在国上位10か国ではオーストリアを除いて2016年と2018年の男女比に変動はあまり見られなかった。イタリア、アメリカ合衆国の研究機関に所属する研究者は両大会ともに女性の割合が男性より高かった。

第10回ウィーン大会、第11回ミュンヘン大会の一般発表テーマ抜粋

第10回ウィーン大会の一般発表では8つのテーマが設定された(表2): 1. 変化と移住(Transformation & Migration)、2. 宗教と儀礼の考古学(Archaeology of Religion & Rituals)、3. 古代西アジアの環境: 変動・影響・適応(Ancient Near Eastern Environments: Shifts, Impacts & Adaptations)、4. 先史・歴史時代の景観とセトルメントパターン(Prehistoric and Historical Landscapes & Settlement Patterns)、5. 経済と社会(Economy & Society)、6. 発掘報告と概要(Excavation Reports & Summary)、7. コンテキストに埋め込まれた図像: エージェンシー・観衆・知覚(Images in Context: Agency, Audiences & Perception) 8. イスラームの考古学(Islamic Archaeology)。

以下筆者の拝聴した発表を中心に各テーマを説明する。テーマ1では物質文化、特に土器の変遷をテーマにした発表が目立った。小泉龍人氏はトルコの銅石器時代遺跡サラット・テペ(Salat Tepe)遺跡出土土器の焼成温度に関する発表を行った。テーマ2では青銅器時代前後の埋葬および儀礼遺構を扱った研究が集中した。ティナ・グリーンフィールド(Tina Greenfield)氏はウル(Ur)の王墓から出土した雄牛の骨の動物考古学および同位体分析の結果を発表し、当時の食性や環境を考察した。

今回最も発表者の少なかったテーマ3では、分野横断的な手法を用いて気候変動や古環境を解明する研究が中心となった。ニコラス・コナード(Nicholas Conard)氏はイランの無土器新石器時代遺跡チョガ・ゴラン(Choga Golan)の遺跡形成過程および層序を微細地形学を駆使して分析し、高精細研究の可能性を提示した。赤司千恵氏はコーカサス新石器時代のギョイテペ(Göytepe)遺跡と先行するハッジ・エラムハンル・テペ(Hacı Elamxanlı Tepe)遺跡出土植物遺存体の比較分析を行い、当地での農耕の導入プロセスを議論した。

テーマ4では近年行われた遺跡表面踏査の報告が相次いだ。ジョニー・バルディ(Johnny S. Baldi)氏は銅石器時代

表2 2016年、2018年 ICAANE における一般発表のテーマ別発表者数

2016年一般発表テーマ	発表者数	2018年一般発表テーマ	発表者数
1. 変化と移住	34	1. 古代西アジアにおける移動性	56
2. 宗教と儀礼の考古学	47	2. コンテキストに埋め込まれた図像	53
3. 古代西アジアの環境: 変動・影響・適応	23	3. 文化遺産としての考古学	26
4. 先史・歴史時代の景観とセトルメントパターン	54	4. ジェンダーと西アジア考古学	13
5. 経済と社会	54	5. 宗教の社会的コンテキスト	13
6. 発掘報告と概要	59	6. 生活空間を形作る	38
7. コンテキストに埋め込まれた図像	44	7. 現地調査報告	137
8. イスラームの考古学	33	8. イスラームの考古学	39

にフォーカスを当て、イラク・クルディスタンのラニア (Rania) 平原での遺跡表面踏査から得られた土器の変化から、社会組織の通時的変化を論じた。

テーマ5では西アジア各地の村落や都市の社会経済的側面に着目した物質文化研究が見られた。前田修氏は新石器時代アナトリアにみられる石器製作における熱処理の非効率性について遺物と熱処理実験から分析し、新石器時代の人々にとっての非効率性・失敗の意味を解釈した。テーマ7では従来のICAANEが得意とする分野である、青銅器時代から鉄器時代の図像と、それが生み出され消費されたコンテキストの研究が主とされた。最後のテーマであるイスラーム考古学は、イスラームの時代の遺物、建築を研究するものから、その時期の遺産の保護に関するものまでさまざまであった。

第11回ミュンヘン大会においても一般発表は8つの異なるテーマに分けられた(表2): 1. 古代西アジアにおける移動性 (Mobility in the Ancient Near East)、2. コンテキストに埋め込まれた図像 (Images in Context)、3. 文化遺産としての考古学 (Archaeology as Cultural Heritage)、4. ジェンダーと西アジア考古学 (Engendering Near Eastern Archaeology)、5. 宗教の社会的コンテキスト (Societal Contexts of Religion)、6. 生活空間を形作る (Shaping the Living Space)、7. 現地調査報告 (Field reports)、8. イスラームの考古学 (Islamic Archaeology)。テーマ1は前回のテーマ1と類似し、人・モノ・アイデアの移動を論じた発表が集まり、物質文化、特に土器を扱う発表が多かった。小高敬寛氏はクルディスタン・シャフリゾール平原の土器新石器時代遺跡シャイフ・マリフ I (Shaikh Marif I) 出土土器の分析を行い、当該地域で埋められていない編年上の空白が埋められる可能性を指摘した。テーマ2は前回のテーマ7の延長線上にあるものであり、青銅器時代から鉄器時代を研究する多くの発表者に好まれるテーマであった。テーマ3は文化遺産を論じるために新たに設けられた部門であり、シリア・イラクを中心に、戦争や開発により危機に瀕する文化遺産の現状報告、および文化遺産を保護し、迅速に多くの情報を記録する方法が論じられた。テーマ4は発表者の数こそ少なかったものの、生物学的性別について具体的に論じることのできる人骨を対象とした発表を中心に議論が交わされた。大会時キプロスに留学中の宮内優子氏は西アジア先史時代の幼児人骨の年齢推定を行い、幼児人骨と埋葬位置の関係に関する発表を行った。エリーヌ・ショットマン (Eline Schotmans) 氏はチャタルホユック (Çatalhöyük) 遺跡の彩色人骨の性差について論じ、またアメリカにある死体農場 (ボディー・ファーム) での彩色人骨再現実験について説明していた。発表者が前回のテーマ2ほど集まらなかつ

たテーマ5では多様な時代、地域における宗教・儀礼に関して論じられた。トルコ、ハジェテペ大学大学院生の田代恵美氏はPPNA期に属するトルコ、ハサンケイフ・ホユック (Hasankeyf Höyük) 遺跡の彩色人骨の分類、年齢、性別、埋葬位置、副葬品との関係に関する分析結果を発表した。テーマ6は日常生活を営む住居という空間的な側面に絞っており、空間に着目する点のみ前回のテーマ4と類似する。ラインハルト・ベルンベック (Reinhard Bernbeck) 氏は紀元前5千年紀イラン、ラハマトバード (Rahmatabad) 遺跡の居住空間の発掘成果を報告し、その変化と居住者の移動性の関係を論じた。テーマ8は前回同様、イスラーム建築、またはイスラーム陶器の報告が多かった。

2008年は4部門、2014年には6部門に分かれていた一般発表のテーマは2016年から8部門に増加し、2018年も維持された。2016年ではどの部門も20人以上の発表者が集まり、議論を深めるには適度な大きさであった。だが2018年は現地調査報告の割合が増加し、発表者の少ない部門と多い部門に分かれ、偏りが生まれた。ちなみに筆者は2016年はテーマ1で紀元前5千年紀イラン、マルヴ・ダシュト平原の土器の製作技術の通時的変化に関する口頭発表を行い(三木 2015)、2018年もテーマ1で同時代同地域のタル・イ・ギャブ (Tall-e Gap) 遺跡とラハマトバード遺跡出土土器の型式学的分析、胎土分析と比較を通じて移動性を論じた。

一般発表における現地調査部門の発表数は2016年(59本)から2018年(137本)にかけて倍増した。ただ2018年は2008年(約100本)、2014年(約170本)に比べて多いというわけではなく、むしろ最多参加者数を記録したにも関わらず2016年の現地調査の発表の少なさが際立っている。これは遺跡踏査を除外したため、及び後述するようにワークショップの一部に特定の地域、時代の発掘報告を統合したものが現れたためと思われる。表3は発掘報告・現地調査部門で発表された、フィールドワークが実施された国ごとの発表数を表したものである。2016年はトルコ、イラン、イラク領クルディスタンが上位を占めた。2018年になると、要旨集に記載された限りではイランが最も多く、ついでイラク領クルディスタン、トルコ、そしてイラクが続く。2016年から2018年まで経済制裁が緩和されたイランでの発掘調査は増加を続けていたことがわかる。また2017年の独立住民投票後の政治的緊張はあったものの、この期間、イラク領クルディスタンは西アジア考古学者たちのフィールドとして、大きく賑わったことがわかる。最後に、イラク戦争から15年が経過した現在、対IS戦の影響が少なかったイラク南部では再び発掘調査が行われるようになりつつあることが明らかである。その他

レヴァントの諸国では大きな変化は見られなかった。

第10回ウィーン大会、第11回ミュンヘン大会のワークショップテーマ抜粋

2016年、実に28ものワークショップが開催された。2008年(6本)、2014年(14本)と比べ、ワークショップの細分化が進んでいる。1ワークショップでの平均発表者数は10名、最大で21名(「西アジアとエジプトの宮殿」(Palaces in the Near East and Egypt))、最小で6名であった。ここでは全てのワークショップを列挙せず、ワークショップの性格を8種類に分類して紹介することにした。

タイプ1. 特定の地域に絞ったもの。例:「アラビア半島の考古学調査」(Archaeology of the Arabian Peninsula: Connecting the Evidence)、

タイプ2. 特定の時代に絞ったもの。例:「鉄器時代社会の形成・組織・発達:比較研究からの展望」(Formation, Organization and Development of Iron Age Societies: A Comparative View)、

タイプ3. 特定の時代と地域に絞ったもの。例:「紀元前1千年紀中央アジアの考古学」(Archaeology of Central Asia during the 1st Millennium BC)、

タイプ4. 特定の遺跡に絞ったもの。例:「遺された『アマルナ時代』の精神:イスラエル、テル=ベト=シェメ

シュ遺跡で発見された後期青銅器時代の宮殿」(Encapsulating the “Amarna Age” Spirit: The Late Bronze Palace at Tel Beth-Shemesh, Israel)、

タイプ5. 特定の研究トピックに絞ったもの。例:「古代西アジアにおける磨製石器と岩石利用遺構」(Ground Stone and Rock-Cut Tools in the Ancient Near East)、

タイプ6. 特定の時代・地域のトピックに絞ったもの。例:「中央・西部アナトリアの農耕フロンティア」(The Central / Western Anatolian Farming Frontier)、

タイプ7. 発掘データ処理・統合の研究。例:「古い発掘データ:我々に何ができるか?」(Old Excavation Data — What Can We Do?)、そして

タイプ8. 文化遺産の保護。例:「シリア文化遺産救出に関するCIPAワークショップ:データ記録・保存・普及のための最良の技術と方法」(The CIPA Workshop on Saving the Heritage of Syria: Best Techniques and Methods for Data Capture, Storage and Dissemination)。

これら28のワークショップ中もっとも多くを占めるのはタイプ5であった(9例)。その次に多いのはタイプ4であった(5例)。タイプ1や2は設定が広いので発掘報告の性格が強い。研究対象を狭めていくほど専門的になり、興味のある研究者の数も減っていく。確かにICAANEは多くの研究者が一堂に会する機会であり焦点を絞った研究会をするには最適だが、細分化のあまり登壇者以外聞きに来ないワークショップも出てくるのではないかと思われた。一方、既存データが膨大になり、オープンアクセス、オープンデータについて関心が高まる現在、タイプ7は今後ますます求められていこう。またタイプ8は緊急の課題であり、このワークショップでの議論がウィーン声明の形に結実したのは概要で記したとおりである。さらに2018年には文化財保護に関する議論の場が一般発表のテーマに移された。

2018年のワークショップは前回より数が減り19のワークショップが開催された。1ワークショップでの平均発表者数は10人、最大で15名、最小で7名であった。先の8分類に従えば、2018年のワークショップはタイプ6が3分の2を占めた(13例。例:「イランにおける文化財科学:調査の現状と展望」(Archaeometrical Studies in Iran: State of Research and Perspectives))。残りはタイプ5が3例(例:「古代西アジアにおける施釉レンガ装飾」(Glazed Brick Decoration in the Ancient Near East))、タイプ2(「『暗黒時代』?メソポタミアと西アジアにおける移行期の指標を特定する」(“Dark Ages”? Identifying Markers of Transition in Mesopotamia and the Near East on a Diachronic Scale))、タイプ3(「青銅器時代のキプロス:地域性と普遍性」(Bronze Age Cyprus: Regionalism

表3 2016年、2018年ICAANEにおける一般発表の発掘、現地調査部門における調査実施国別の発表者数

発掘・現地調査が実施された国	発表者数 (2016)	発表者数 (2018)
Afganistan	0	1
Armenia	1	1
Azerbaijan	1	2
Bahrain	0	1
Cyprus	0	2
Egypt	2	0
Georgia	2	4
Iran	9	36
Iraq	4	15
Iraqi Kurdistan	8	28
Israel	5	4
Jordan	4	7
Lebanon	5	5
Oman	0	1
Syria	5	7
Turkey	10	21
Turkmenistan	1	1
Uzbekistan	1	1
Yemen	1	0
合計	59	137

versus Interculturalism))、タイプ4 (「シャフリ・ソフタ遺跡での新旧学際研究」(New and Old multidisciplinary Researches at Shahr-i Sokhta in a Historical Perspective)) が一例ずつであった。

特に多いタイプ6で好まれたテーマは一般発表のテーマ1と同じ移動性であった。「アラビア半島における移動性」(Mobility in the Arabian Peninsula)、「先史中央アジア南部の考古学における交流と移動性を定義し直す」(Redefining Interaction and Mobility in Prehistoric Southern Central Asian Archaeology)、「前2千年紀エジプトとレヴァント間における移動と移動性」(Movement and Mobility between Egypt and the Levant in the Second Millennium BC))。また発表を聞く機会はなかったが、「東地中海の青銅器時代および前期鉄器時代における古遺伝学と考古学的文化の展望」(Palaeogenetics and Cultural Archaeological Perspectives on the Eastern Mediterranean Bronze and Early Iron Age)では興味深い議論が行われた。考古学的文化とエスニシティの関係が議論されてきた4つのトピック(例:ミノアとミケーネ)を取り上げ、各トピックで考古学者と古遺伝学研究者が一人ずつ発表を行った。古代DNA解析という先端的手法を用いることで過去の集団移動の具体的な様相に迫れる一方、考古学文化と特定の民族の関係を議論することは、戦前の反省を踏まえ、慎重になるべきである。

ポスター発表

一般発表、ワークショップと並行してポスター発表も行われた。第10回大会のポスター発表はメイン会場の2階で行われた。第11回大会のポスター発表はミュンヘン大学広間の右側でポスターを一列に並べた状態で行われた(図3)。両会議の後半にコアタイムが設けられ、活発な議論が行われた。2016年からポスターアワードが設けられ、閉会式で3名程度優秀な研究者が表彰されるようになった。筆者の知り合いの修士課程の学生も入賞していたので、学生にとっても自らの研究に評価を受ける千載一遇のチャンスといえよう。

おわりに

以上、本稿ではICAANE参加者の構成、現地調査実施国、研究テーマの変化を叙述した。そこから垣間見えてきたのは、西アジアの様々な地域で調査を行う、世界各国の女性、男性参加者を多く抱えたICAANEにおいて、一般発表、ワークショップのテーマ選定を通じて「西アジア考古学」に関する基礎的な議論を深め、研究分野の開拓が進められている姿である。また両大会の研究テーマから読み取れた西アジア考古学と現代社会の関わりについて、2例

取り上げる。1例目は危機に瀕する文化遺産への関心の高まりと保護に向けた行動の実現である。2016年のウィーン声明で国際社会へ提言されたこと、例えばシリアの研究者たちの各国の研究機関での受け入れ、及び文化遺産保護に向けた育成は既に始まっている。2例目として2016、2018年を通して移動性をめぐるテーマが増えたことを指摘したい。過去の人々の移動とその影響に関する考古学的研究を通じて、移民問題といった現代の人々の移動と社会の関わりに再考を促す意図があるのかもしれない(ハミラキス2018)。次のICAANEは2020年、イタリアのボローニャで開催される。ウェブサイトにて一般発表のテーマが確認できる(<https://eventi.unibo.it/12icaane>)。8つのテーマが提案され、その中ではオープンデータに関するテーマが創設され、文化遺産の保護に関するテーマは継続している。その他の一般発表テーマの趣旨も現代考古学の課題と調和するようアップデートされている。世界各国の西アジア考古学者たちが、自分たちの扱える資料、遺跡と向き合った上でどのような発表を行うのか興味深い。筆者は今後も「西アジア考古学」を取り巻く環境と研究の関心が移り変わるなかで、ICAANEは変化していくのか、注目を続けていきたい。



図3 第11回大会ミュンヘン大学ポスター会場の様子
(筆者撮影)

筆者の第10回、第11回大会への参加はDAAD奨学金の資金援助によるものである。5日間にわたって大会の成功に貢献された両大会の運営委員会の方々には厚く御礼を申し上げたい。筆者の口頭発表にあたり東京大学総合研究博物館の西秋良宏教授、イラン国立博物館のホセイン・アジジ・ハラナギ (Hossein Azizi Kharanagi) 氏、そしてベルリン自由大学のラインハルト・ベルンベック教授は相談に乗ってくださった。また総合地球環境学研究所の近藤康久准教授、首都大学東京大学院博士課程の黒沼太一氏からは動向を執筆する上で有益なコメントを頂いた。ここに記して感謝申し上げる。

参考文献

- Hodder, I. 2012 *Entangled. An Archaeology of the Relationships between Humans and Things*. Oxford, Wiley-Blackwell.
- Horejs, B., C. Schwall, V. Müller, M. Luciani, M. Ritter, M. Guidetti, R. B. Salisbury, F. Höflmayer, and T. Bürge (eds.) 2018 *Proceedings of the*

10th International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East 25-29 April 2016, Vienna. Wiesbaden, Harrassowitz.

- Pollock, S. and R. Bernbeck 2005 Introduction. In S. Pollock and R. Bernbeck (eds.), *Archaeologies of the Middle East Critical Perspectives*, 1-10. Malden, Blackwell.
- 門脇誠二 2009 「第6回国際古代西アジア考古学会議に参加して」『西アジア考古学』10号 77-82頁。
- 紺谷亮一 2001 「第2回国際古代西アジア考古学会議コペンハーゲン大会」『西アジア考古学』2号 138頁。
- ハマラキス、Y. 2018 「強制移動と非正規移動の考古学」『現代思想』第46巻13号 2243-2828頁。
- 藤井純夫 2013 「西アジア考古学の歴史と意義」西アジア考古学講義ノート編集委員会 (編) 『西アジア考古学講義ノート』3-6頁 日本西アジア考古学会。
- 三木健裕 2015 「イラン南西部、マルヴ・ダシュト平原銅石器時代における土器の変化—タル・イ・バクーン A、B 遺跡出土土器の製作技術研究—」『オリエント』58巻2号 139-155頁。
- 宮内優子 2015 「第9回国際古代西アジア考古学会議に参加して」『西アジア考古学』16号 55-59頁。

三木 健裕

ベルリン自由大学歴史文化学部
古代近東考古学研究所博士課程

Takehiro MIKI

*Institute for the Ancient Near Eastern Archaeology,
Free University of Berlin*